

【第二回】「漢字（五体）の基本と書き方」

楷書① 字体の流れと書写の字形

常葉大学教授
本誌編集委員 平形 精逸

◆はじめに
今月から三回にわたって、基本書体である楷書を取り上げます。今回はまず、手書きによる筆写体とフォントによる活字体のルーツを追って両者を比較し、次に書写の規範字形のあり方について考えます。

■楷書字体の二系統

図1は、書写体の流れを「A系統」、活字体の流れを「B系統」として、それぞれの系統がどのように推移しながら今日に至ったかを示しています。

A系統は先月号の図2で、中央の横軸に示した正式書体の流れです。隷書から楷書が発生・展開し、初唐の三大家の整齊な姿に至るま

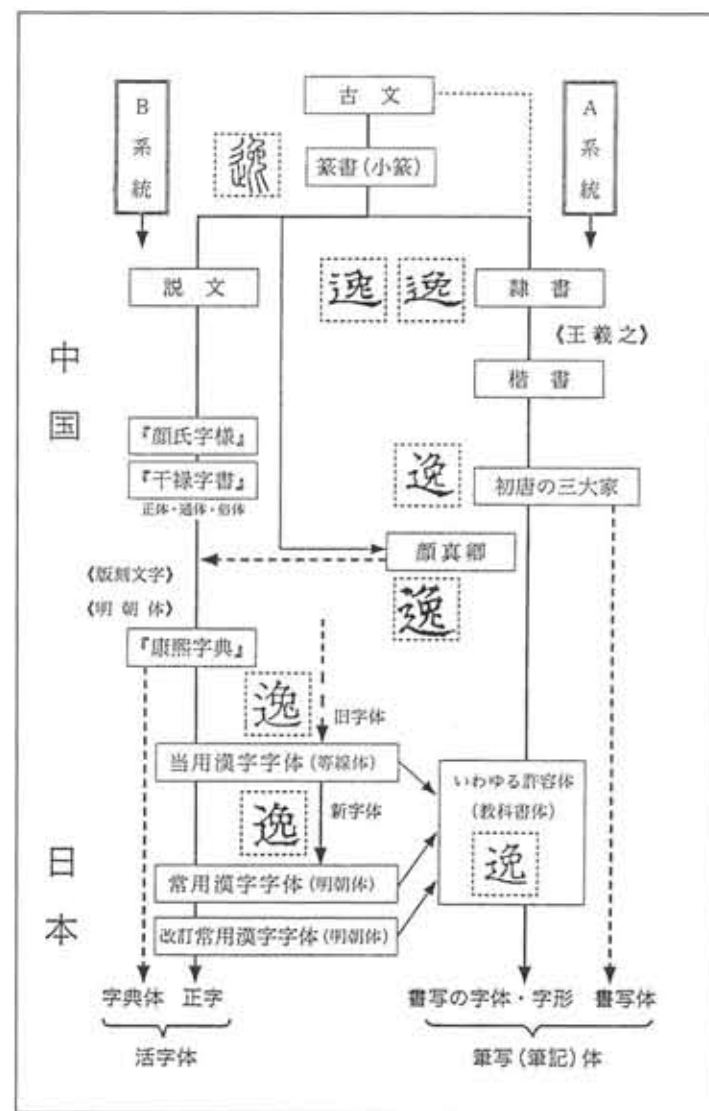


図1 楷書字体の二系統図（『書の古典と理論』より 作成 平形）

での王羲之の書法を継承する流れです。一方、B系統は活字のもとに、正統な楷書を伝統ある篆書に求める流れです。中唐の顔真

卿は、楷書に篆書の用筆である藏鋒を取り入れた独特の「顔法」で知られていますが、字形にも篆書化がかなり見られます。

最も権威ある字典である清朝の『康熙字典』（一七一六年）には四万七千余字がおさめられ、字形は顔真卿の楷書をもとにした明朝体で表されています。この、小篆を楷書化して造られた正字の体系は「字典体」と呼ばれ、わが国の字形の標準にも大きな影響力を及ぼすようになりました。

昭和二十四年（一九四九）に制定された『当用漢字字体表』は等線体で示されましたが、印刷体と筆写体の接近が図られました。さらに学校教育における筆写体の標準として作られた『教科書体』は、昭和五十二年（一九七七）の『小学校学習指導要領』によって統一され、今日に至っています。

■楷書字体変遷のパターン

以上のように、筆写体と活字体の分化は、正統な形に対する考えが目的や用途に応じて異なった結果といえるでしょう。しかし、一つひとつの文字の変化を調べてみるとすべてが同じとは限りません。図2は、代表的な変遷のパターン五例を示したものです。

A 最もシンプルで筆写体が活字体にそのまま移行しています。1・2画の長短は活字固有のデザイン処理によるものです。

B 「口」と「口」を接合する画は篆書によりますが、そのつかない筆写体のルーツは古文に求められます。

C 「田」の中を点につくるのは篆書や顔真卿の楷書によります。「会」は「會」の草書からとったものです。

D 旁の上部も篆書などによりますが、「從」の上部は初唐楷書の筆写体からです。

F 「免」の最終の点や、「しん」の一点のルーツも篆書などによります。詳しくは『漢字字形の問題点』（野崎邦臣著、天来書院、二〇一三）を参照するとよいでしょう。

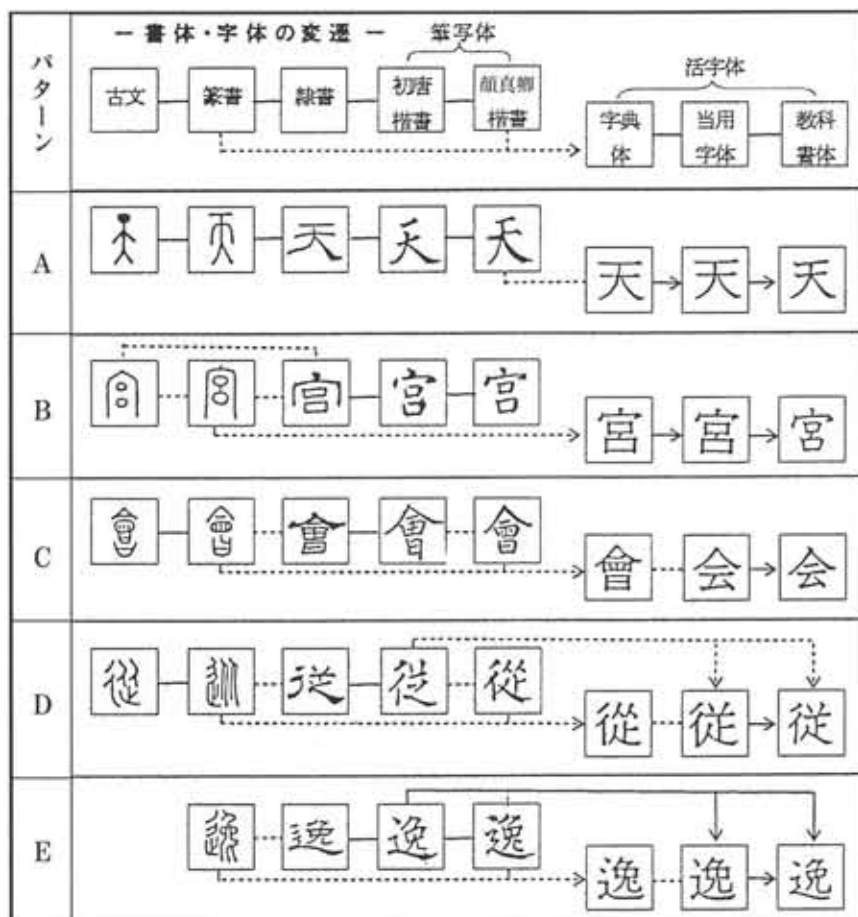
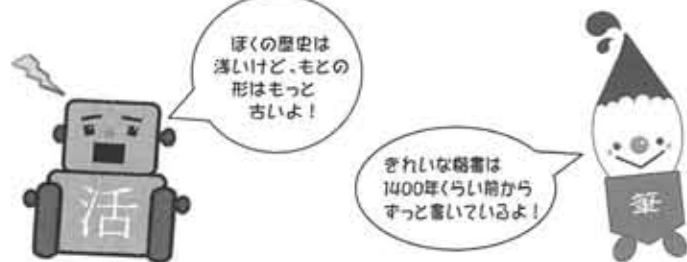


図2 字体の変遷パターン



ほくの歴史は
薄いけど、もとの
形はもっと
古いよ！

きれいな楷書は
1400年くらい前から
ずっと書いているよ！

■古典楷書と教科書体の字形

唐の四大家と教科書体・明朝体の関係を見てみましょう。図3はこれらの関係を示したものです。四大家の中で書写の規範となる字形や書方に最も近いのは、虞世南「孔子廟堂碑」と欧陽詢「九成宮醴泉銘」です。両者の相違点などは米月号で取り上げますが、整齊な字形と露鋒による簡潔な用筆は教科書体ともかなり似ています。字形だけみれば、褚遂良「雁塔聖教序」もこれに準じます。

顔真卿の楷書は正方形に近い概形支配が強い。ため、書写特有の固有結構（それぞれの文字の持っている形）はかなり抑制されています。前

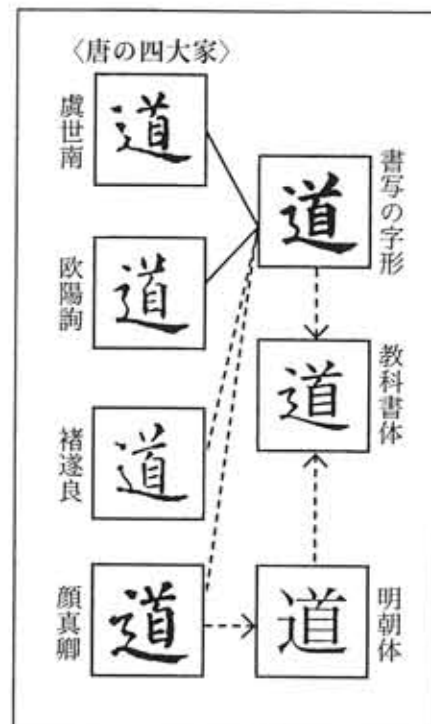


図3 唐の四大家と活字などの関係

家 家

述のような要因により、教科書体よりも明朝体活字に多くの類似点を見出すことができます。「顔氏家廟碑」の縦画の「はね」や「右ばらい」の収筆などを見比べてみましょう。

次に、唐の四大家と教科書体の文字を少し細かく比較してみましょう。

図3の「道」では「しんにょう」2・3画の接し方が異なっています。筆写の文字は2画の収筆が3画の起筆位置より少し右に接しています。

図4「光」の古典では、最終画のはねの上方に余白ができていますが、横画の右上がりになり急である他、活字ではほぼ正方形におさまっています。「東」の3・5画の接し方は、他の同じ部分を見てもあいまいに示されています。古典では行書との関連から横画が優先していますが、書写の楷書教材では、筆順との関係から「口」以外は縦画を出すのが一般的です。中央縦画の収筆が活字で止

虞世南 孔子廟堂碑	欧陽詢 九成宮醴泉銘	褚遂良 雁塔聖教序	顔真卿 顔勤礼碑	教科書体 活字
光	光	光	光	光
東	東	東	東	東
書	書	書	書	書
陽	陽	陽	陽	陽

図4 唐の四大家と教科書体の文字

■書写の規範字形に対する考え方

以上のように、古典楷書と教科書体の形に明らかなズレがある場合は理解しやすい書き方が優先されますが、微妙な字形の細部となると、筆者の感性や考え方、さらに書写教育観などに左右されることになります。私たちは教科書体の字形を基準としながらも、伝統に培われた書き文字のバランス感覚を生かし、品位ある書の世界へといたさう努力をすることが大切です。

図5は、A・B二つの書写字典と古典文字などを対比したものです。Aは、戦後小学校での毛筆書写必修を機に発行された「書写字典」（藤原宏・水田光風編、講談社刊、一九七三）、Bは「常用漢字表」の改訂をふまえて最近出版された「常用漢字書きかた字典」（宮澤正明編、二玄社刊、二〇一二）です。「百」は二つの縦画を平行にするか、下方をすぼめるかの違いです。Bは教科書体の形を意識しているかのように見えます。「章」の古典文字は書写体ですが、Aは右上が

りが強いことに起因する重疊法（下方を中心より少し右にずらして安定させる方法）を生かしています。Bの横画はほぼ水平のため、下方の縦画を中心にするか見えます。また、「立」が大きく重心も下がって見えます。「節」も書写体ですが、「ふしづくり」の位置に違いがあります。Bは「即」の左右上部をそろえて右下をあけていますが、Aは「ふしづくり」を下げ、下方をそろえる傘状形を取り入れているので、さわやかな明るい感じがします。この原理は「郡・辞・群」などにも応用できます。「兵」はA・B共に3画の位置が高く、古典と乖離しているのが気になります。筆順も誤りやすくなります。



図5 書写の字形と古典の文字など

■参考図書

「解説 字体字典」（江守賢治著、三省堂刊、一九八六）